

## はじめに

### ○激変する降雨特性と高まる都市型水害への懸念

近年、沖縄県においては、気候変動の激化による、集中豪雨の増大と人口の増加に伴う都市化の進展、市街地域の拡大が相まって、浸水被害、土砂災害が頻発している状況にある。また、集中豪雨の増大に相反して年降水量は減少傾向にあることから、主要な水資源開発施設であるダムの水供給実力が低下しており、渇水被害の発生も懸念される。さらに、近年の調査、研究の結果によると、沖縄も大地震に見舞われる確率が高いことが指摘されており、地震、津波被害も懸念される。

### ○地球温暖化への懸念

また、将来的には、地球温暖化の影響による異常豪雨の増加、無降雨日の増大、海面水位の上昇も予測されており、これに伴う洪水被害・土砂災害の激化、深刻な渇水被害、海岸侵食による砂浜の消失、サンゴ・リーフの衰退による海岸災害の激化等も懸念される。

### ○失われつつあるもの

環境面においては、河川水質は改善傾向にあるものの、都市部においては依然として環境基準を満足していない河川もあり、沖縄県における特徴的な課題である赤土砂流出も依然として続いている。また、人工構造物による河川の上下流分断や、流域と河川の分断などにより、多様性に富んだエコトーンとしての生物の生息環境等の河川環境が悪化しているとともに、身近な水辺の歴史や文化・景観も失われつつある。特に都市部においては、災害危険箇所がわずかに残された緑地空間となっているところも多い。さらに、沿岸域においては、海水温の上昇や海域水質に起因するサンゴの白化現象なども顕在化している。



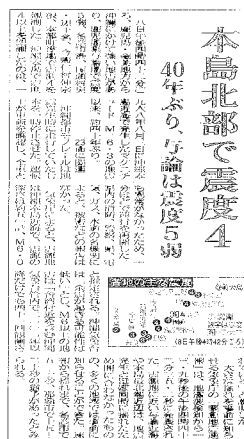
河川の氾濫による浸水被害（安里川）

国際通り付近(平成19年8月11日)



集中豪雨による地すべり被害（中城村）

村道坂田線付近（平成18年6月12日）



琉球新報（H20.7.9）



琉球新報(H20.7.15)

## ○何ができ何ができなかったのか

これまでの沖縄の治水事業は、本土復帰後3次にわたる沖縄振興開発計画（S47～H13）、沖縄振興計画（H14～H23）及び「沖縄の川を考える懇話会」による提言を受け、平成9年に策定された「亜熱帯の島沖縄から示す21世紀におけるアジアや太平洋の島々へ広がる川づくり」に基づき水資源開発や河川事業、砂防、海岸事業に関する各種施策を展開してきた。その結果、水資源の確保、河川・海岸・土砂災害に係る災害防止対策は着実に進展し、安全・安心の確保による産業・生活基盤の充実に伴い県民生活を大きく向上させた。また、各事業において、自然環境に配慮した整備や人々がふれあうことのできるような親水整備を行うことで、環境、レクリエーション、観光の面からも一定の事業効果を発揮してきている。

しかしながら、平成20年3月末現在での治水関連施設の整備率は、河川事業約56%、砂防事業約16%、海岸事業約55%にとどまっており、水資源の確保については、人口・観光客の増加、離島地域における慢性的水不足等から未だ十分とは言えない状況である。また、多自然川づくりにおいては、画一的な整備となっている面もあり、必ずしも地域の特性、個性を反映させたものとはなっていない。また、これまでに多種多様な情報提供システムの整備が進められてきているが、十分に活用されているとはいえない状況にある。

## ○新たなビジョンの必要性

今後は、前述の問題に対処するため、山、川、海をつながりを考え、流域内の関係者が一体となった、流域・地域を視点とした総合的な治水対策や水質・赤土砂対策、良好な河川環境の再生などが重要である。また、渇水や地震・津波、土砂災害など不測の事態への対応についても十分な情報の共有と関係機関の連携、住民と協働した取り組みが必要である。また、地球温暖化には将来的な影響の予測と早めの備えが重要である。

後述するこれまでの取り組みのレビューと課題を踏まえると、流域、地域、協働の視点が重要であることが認識されている。



清流が流れる奥川（国頭村）



垣花樋川（かきのはなひーじゃー）玉城村

写真：「水のいまむかし」（沖縄の水研究会）

かつて琉球の先人は、地理風水学を用いた河川改修や、首里城における細やかな水利用ネットワーク、水系を単位とした地域区分による共同体的関係の構築など、様々な知恵と工夫、協働によって困難な自然条件を克服してきた。

今後は、安全・安心で豊かな社会を築くため、先人に学びつつ、行政の横の連携はもとより、地域住民と協働しつつ多様な施策を展開していくことが望まれている。

そこで、沖縄における今後の取り組みの理念と基本方針を以下のように設定し、本ビジョンを取りまとめた。

<理念（基本的な方向性）>

## 未来へ受け継ぐ魅力ある沖縄の山、川、海づくり

～ つながりの回復と将来への備え、流域の視点と多様性を重視した質の高い整備を目指して ～

山、川、海が水の循環により、環境としてお互いに強いつながりを有していること、人々の暮らしが流域という空間単位の中で培われてきたという歴史的な事実を認識する事が重要である。また、今日の沖縄の発展が流域という単位を超えた諸活動によりもたらされているという現実、さらには地球温暖化や大地震といった自然現象がこれらの諸活動に悪影響を及ぼしかねないという現実も捉えながら、今後の真の意味での沖縄の持続的発展を河川、砂防、海岸行政の面から支えていく。

その取り組みにおいて、関係機関を横断する総合的な施策の展開と県民、地域との協働により、つながりの回復と将来への備え、多様性と高い質に根ざした未来に受け継ぐ魅力ある沖縄の「山、川、海づくり」を進めていく。

基本方針	目指す姿
(1) 水害・土砂災害からの安全の確保	<ul style="list-style-type: none"> <li>・激化する風雨に耐えうる安全な山、川、海</li> <li>・知恵と工夫、先人の流域管理に学び、多様で質の高い手法と技術で守る沖縄の山、川、海</li> <li>・将来にわたって機能を発揮し続ける施設と、人々に守られた安心な山、川、海</li> </ul>
(2) 安定的な水資源の確保	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ひとびとの生活に密着した利水機能を有するゆとりある川</li> <li>・将来にわたり安定的に確保できる水資源</li> </ul>
(3) 良好な環境・景観の形成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・沖縄らしい自然が感じられる多様性に富んだ山、川、海</li> <li>・沖縄というふるさとの歴史や文化、風土を受け継ぎ、沖縄の象徴となる山、川、海</li> <li>・生活レベルの循環、流域レベルの大きな循環の中で、豊かなつながりを持ち続ける山、川、海</li> </ul>
(4) 多様な連携と住民参加	<ul style="list-style-type: none"> <li>・縦のつながりと横のつながり、ひとびとの力で守り育てる山、川、海</li> <li>・自助、共助、公助、正しい知識と確かな意識に根ざした安心な山、川、海</li> </ul>
(5) 地球温暖化への対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・未来を展望し、独自の知恵で守り、受け継ぐ亜熱帯の島沖縄</li> </ul>

○ビジョンの取りまとめにあたって

今後の河川、砂防、海岸事業を進めるにあたって、様々な課題に対する解決の方向性を見出すため、学識経験者や有識者から構成される、「沖縄の山、川、海を考える懇話会」を4回にわたって開催し、多数の貴重なご意見を賜りました。

これらの意見を踏まえ、本ビジョン「沖縄の山、川、海をつなぐ将来ビジョン」をとりまとめました。

今後、沖縄においては、本ビジョンを社会資本整備重点計画に基づく「次期沖縄ブロックの社会資本整備に係る地域の将来の姿（案）」の中の治水事業における大きな方向性、指針として反映させ、各種施策の展開を図ってまいります。

## 沖縄の山、川、海を考える懇話会

(懇話会委員名簿)

(50音順・敬称略、○は座長)

安里 進	沖縄県立芸術大学教授
大城 保	沖縄国際大学経済学部教授
宜保 清一	琉球大学農学部教授
小濱 哲	横浜商科大学貿易・観光学科教授
崎山 正美	(有)風水舎代表取締役
諸喜田 茂充	琉球大学名誉教授
高平 兼司	(財)沖縄県公衆衛生協会事務局次長
○津嘉山 正光	琉球大学名誉教授
藤田 陽子	琉球大学法文学部准教授
前泊 博盛	琉球新報社論説副委員長
屋宜 聡	沖縄タイムス社編集局次長
山崎 秀雄	琉球大学理学部教授